

教育学者のあたふた子育て・親育ち(3)

子どもをもたない保育者の専門性とは(1)

佐久間亜紀

前回(本誌二・三月号)、編集部からこの連載のお話をいただいた時、最初はお断りしていたと記しました。私の胸中は、とても複雑だったのです。

実は、私にはなかなか子どもができませんでした。結婚して八年以上、赤ちゃんがほしい自分と、授けられない現実とのほざまで苦しみ続け、いろいろなことを考えました。でも、人生というのは本当に、予想外のことが起こるものなのです。泣いて泣いて、やつとの思いで心に整理をつけ、子どものいない人生を歩んでいこうと素直に思えるようになったころ、

思いがけず赤ちゃんを授かることになったのです。もちろん、出産してから私の人生は激変し、いまの私にとって、娘はとても大きな存在となっています。ところが同時に、子どもを授からないまま生きていたはずの人生も、激変どころか紙一重の違いに過ぎないものを感じられ、とてもリアルで大きな存在なのです。出産したからといって、「母となった自分」だけを前面に押し出すことは、「母でなかった自分」を否定するようにも思われ、大きな葛藤を感じずにはいられませんでした。

ただ、いまの私には、コウノトリを待ち続けた長い長い歳月は、私にとつてどうしても必要な、大切な時間だったと思えます。そして、そのころに感じたり、考えたりしたことは、絶対に忘れられない貴重な財産となっています。特に、「子どものいないあなたに、教育の何がわかる」という批判を、陰に陽に何度も投げかけられる中で、保育者や教師の専門性について、多くのことを考えました。

最終的に、この連載をお引き受けすることにしたのは、「母でなかった私」も含みこんだ私の思索を語ることで、ほんの少しでも誰かのお役にたてるなら、これほどありがたいことはないと思つたからです。少し重いテーマになりますが、ほんの少しだけ、おつきあいいただきたいと思ひます。

自分をまるごと否定される苦しみ

赤ちゃんを待ち望んでいたころの毎日を思い出す

と、いまでもちよつぱり、つらくなります。いまでも、不妊も堂々と語られるようになり、社会の理解も進んできているように思いますが、当時の風潮はいまよりずっと厳しいものでした。

「子どもはまだ？」という何気ない質問に、私自身が焦りや不安を感じるようになると、周囲からたくさんコメントやアドバイスが寄せられるようになりました。いわく、「仕事しすぎなんじゃないの？」「ちゃんとした食事をしているの？」「スーツとか身体を締めつけるような服がいけないんじゃない？」「ストレスを感じるのがよくないってよ」「子どもをあきらめたら妊娠したって聞いたよ」。

親戚や友人が親身になつて心配してくれる気持ちは、とてもありがたく感じられました。でも、それらの言葉は、しだいに私を追いつめていくようになりました。会う人会う人、みんなが「仕事をしている私がいけない」「食べているものがいけない」「服

装がいけない」「ストレスを感じるような精神の在り方がいけない」——こう言っているように感じられたのです。そして挙げ句の果てには「子どもが欲しいと思うこと自体もいけない」「子どもがいけないのはもつといけない」と。いったいどうすればよいというのでしょうか。まるで、いまの私のすべてがダメだと、世界中から否定されているようでした。「子どもがいけない」というのは、「わたし」の属性の一つにすぎないはずなのに、まるで「子どもがいけない」という一点だけで、「わたし」の存在価値がまるごと否定されているようなのです。

職場での経験

しかも何の因果か、私は子どもが本当に大好きで、子どもとかかわることを仕事にまでしてしまっていました。職場に行つてまでも、自分に子どもがいけないという事実に向き合わざるを得ない生活が、

延々と続いたのです。当時の私に、逃げ場はありませんでした。

幸いなことに、大学にいれば乳幼児には会わずに済みましたし、同僚の多くは、私が妊娠しないことには、あえて触れずにいってくれました。ですが、若い学生たちにそんな配慮などあるはずがありません。普段の私が、学生からみて親しみやすい存在だったこともあったのですが、彼らの言動は、あまりにも率直で容赦ないものでした。

ある学生からは「佐久間先生はそんなに子どもが好きなのに、どうして子どもを産まないんですか。子どもを産まないと、教育のことなんかわからないんじゃないですか」と、まるで諭されるように、強く言われました。前途に満ちたその若い学生には、思い通りにならない人生があるなんてことは、想像すらできなかつたのでしょうか。当のその学生たちのために、どれだけ仕事が増えていたかわからないと

いうのに、本人に感謝されるどころか、批判されている自分が、あまりにも情けなく思われました。

また別の学生は、突然私の研究室にやってきて、「僕は高校時代に、こんな素晴らしい授業を受けたことがあります。先生はどう思われますか」と、黄ばんだプリントを差し出しました。それは高校の道徳の授業のプリントで、当時はまだいまほど一般的にはなっていない不妊治療について、「人間が命を操作してよいのか」と、ストレートに批判する内容のものでした。本当なら、学生の気持ちを受け止めたいので、私の状況を率直に打ち明け、プリントの内容について語り合うべきだということは、頭ではわかっていました。でも、当時の私には、そんな心の余裕は全く残っておらず、正直なところ、もう本当に勘弁してくれ、と泣き出したい気持ちでした。私がどんな反応をするのかを、この学生が試しているように感じましたのです。

幼稚園での経験

特にしんどい思いをしたのは——保育の関係者である読者諸氏には大変申し訳ないのですが——、仕事で幼稚園に行かなければならない時でした。当時の私の生活圏の中で、幼稚園ほど「女性性」に満ちた場は、ほかになかったのです。

「うらやむという言葉は、裏で病むということだ」と、聞いたことがあります。いまから考えれば、当時の私の心は本当に「裏で病んでいた」のだと思います。子どもたちの輝く笑顔を見るたびに、私には子どもがいないんだという暗い思いが、心の中で闇のように広がってゆくのを感しました。お迎えにくるママたちの中には、兄弟姉妹を身ごもっている妊婦さんも少なくなく、その大きくせり出したお腹は、ゆさゆさと揺れながら、ものすごい勢いで私に迫ってくるように感じられました。また、私を迎え

る園の先生方からは、決まって「佐久間先生のお子さんは何歳ですか」と尋ねられました。そのたびに「私にはまだ……」と答えなければならず、相手の先生が申し訳なさそうな顔になると、こちらも申し訳なさでいっばいになりました。「あら、お子さんいないんですか」と明らかに落胆されたり、「早く産まないと大変ですよ」と年配の先生からアドバイスされたりした時は、私の身体は幾重にも小さくしほみ、このまま消えてしまいたいと思つたものでした。

保育者と不妊

保育の現場にも、なかなか自分の赤ちゃんができないと悩むスタッフがたくさんいて、しんどい毎日を送っているのではないのでしょうか。私にとつて、何にもましてつらかったのは、前述の学生の言動のように、私自身に子どもがいらないせいで、職場での仕事に対する評価さえも低められているように感じ

られた時でした。保育の現場ではなおさら、同様の評価にさらされやすいことでしょう。

女性性とかかわりが深い専門職にとつては、自身に子どもがいらないということが単に外からの評価に不利に作用するだけでなく、自分自身の内側の苦しみを深めてしまう場合も多いので、本當につらいのです。

究極のつらさは、たとえば助産師さんでしょう。以前イギリスのテレビで、不妊に苦しむ助産師さんを追つたドキュメンタリーを見たことがあります。助産師としての力量を高めることに力を注ぎ、妊婦さんのために尽力してきた彼女は、いざ自分の子どもを望んだ時に、なかなか授からないという現実に直面してしまつたのです。しかもその苦悩の中でお、ほかの女性の出産に自ら立ち会い、幸せいっばいの母親たちの産後のケアをしていかなければなりません。悲しみと嫉妬と羨望と、いろいろな気持ち

が心を渦巻き、「ケアされたいのは自分のほうなのに」と泣いていました。仕事を辞めてしまえば、その意味では気持ちには楽になりますが、それでは、それまでの自分が力を注いできたもの、すべてを捨てることになってしまいます。それにもかかわらず、職場の理解は充分とはいえず、24時間体制が求められる過酷な勤務シフトの中で、妊娠した助産師や、子育てに追われる助産師への配慮がどうしても優先されてしまい、彼女のようにこれから妊娠したい助産師に、夜勤などの負担が一層重くのしかかっている、というのが現実なのでした。

コウノトリの到来を待ち望む保育スタッフの思いは、いかばかりかと祈るような気持ちにならざるを得ません。妊娠中や育休明けのスタッフに、手厚い配慮が必要なのはいうまでもありませんが、独身スタッフや、これから親になりたいと願うスタッフへの配慮も、同じように大切なことです。どの園の経

営も厳しく、課題は山積していますが、少なくとも精神的な面だけでも、すべてのスタッフにとって思いやりと配慮のある職場を、みんなでつくっていきたいものです。二人目不妊で悩んでいるママやパパも少なくありませんから、保育者同士がケアしあい、ありのままの姿を受け入る雰囲気がつくられている職場では、きっと保護者への配慮も深まり、保育の質も高まっていくに違いありません。

子どもにない保育者の専門性とは

それにしても、いったい、子どもにない保育者の専門性は、子どもを産み育てている保育者の専門性よりも、本当に劣るのでしょうか。なぜ、私も含めて多くの人は、自分の子どもをみてくださる保育者に、子どもがいるかどうかが気になっってしまうのでしょうか。――次号に続く――

(上越教育大学准教授)